



カトリック町田教会
町田市中町 3-2-1
電話 042-722-4504
FAX 042-722-4512

いかずちの子

http://www.machida-catholic.jp/



「見よ、おとめが身籠って男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。この名は『神は私たちとともにおられる』という意味である」

マタイ 1. 21-23

稲の苗・信仰の苗

主任司祭 小池 亮太

今年の十月中旬、花巻にある大沢温泉の自炊部に逗留してきました。目的は温泉にゆっくり浸かって、疲れを取るためでしたが、花巻で無農薬無肥料で米を栽培している弟を訪ねるのが、もう一つの目的でした。今年には田植えの季節に身体を壊していたので、しなければならぬ作業ができず、無肥料なのでもともと少ない収量はさらに少なかったそうです。それでも、稲刈りと脱穀が終わる「これで〈秋じま

い〉だ」と、彼は言いました。〈秋じまい〉とは、「一年の農作業の終わりを意味する言葉なのだそう。そして、来春の農作業の始まりの話になりました。稲は苗を作って、田圃に植え付けますが、それには理由があります。植物の種が芽を出すためには、まず〈水〉、そして〈温度〉が必要。しかし、発芽した種を水に浸したままにしておくと、芽は伸びません。水の中は〈酸素〉が少なく、

種が呼吸できないからです。このように、種が芽を出して生長するためには、〈水〉〈温度〉〈酸素〉の三つが揃わなければなりません。田圃に種を蒔くと、三つの条件がなかなか揃わず、発芽と生長が遅れる可能性があります。そうなる、稲は株を大きくしなければならぬ時期や花を咲かせる季節を逸してしまい、実りが悪くなります。だから、人の手で三つの条件を管理して成長させた苗を田圃に植えるわけです。まず、種に〈水〉を十分に吸わせ、必要な〈温度〉を加えて、一斉に発芽させます。それを、〈酸素〉を含んだフカフカの土を入れた箱に蒔いて、温度を管理しながら芽を生長させて、苗を大きくします。こうして、しっかりと育った苗が田圃に植え付けられます。幼児洗礼を受ける子どもたちは、種初のように、赤ちゃんに〈信仰〉の芽が出るように、額に〈水〉を注がれて、〈洗礼〉を受けます。種初が〈水〉だけでは発芽しないように、〈温度〉のような〈聖霊〉が神から注がれないれば〈信仰〉の芽は出ません。しかし、出てきた〈信仰〉の芽は、そのままでは成長できません。〈酸素〉を含んだ土のように、〈愛〉に満ちた家

庭と教会共同体があって、初めて子どもたちの〈信仰〉の芽は成長します。さらに、大きく成長するために、日曜日ごとに〈聖体〉が与えられ、時が来て〈堅信〉を受けると、田圃に植えられた苗のように、社会の中で〈信仰〉を生き始めます。

人の手で、大切に育てられた稲の苗が、梅雨の長雨、夏のやませ（冷たい風）、秋の台風に耐えて黄金色の穂をたわわに実らせるように、〈信仰〉の苗をしっかりと育てられた子どもたちは、社会の中で様々な困難に遭いながらも成長し、〈信仰〉の実りを豊かにつけるはず。将来、子

集会祭儀と召命

運営委員（一粒会担当 兼 生涯養成委員長）

パウロ 廣田和之

岡田大司教様の許可を得て十月二十二日夜から二十三日、三回の典礼祭儀において、町田教会初の「主日の集会祭儀」が行われました。小池神父様と典礼奉仕に携わる皆様による周到な準備、ラファエル助祭の優しく落ち着いた司式と「町田教会初の集会祭儀を成功させたい」という一人一人の祈りが実り、私たちは『主日に集い』『復活された主に出会い』『共に御言葉を聞き』『助祭

どもが置かれた場所で成長し、世界に多くの実りをもたらすために、それぞれの家庭と私たちの教会共同体は、子どもたちの〈信仰〉の苗をしっかりと育てられているのだろうか……。 「都心での十一月の降雪は五十四年ぶり、積雪は観測史上初めです」と伝えるラジオのニュースを聞いて、暗い灰色の空から雪が舞い落ちてくるのを見上げながら、輝く太陽の光を反射してキラキラと輝く春の田圃に、鮮やかな緑色の早苗がそよぐ風景を頭に思い浮かべて、そのような事を考えていたのでした。

や聖体奉仕者の助けを得て、御聖体を拝領することができました。そして『主日を聖とする務めを果たすこと』ができ、『それぞれの生活の場に派遣』されたばかりではなく、共同体の皆様が一つになった素晴らしい『時』を共に過ごす喜びもいただきました。

今回の集会祭儀は、助祭の司式によるものだったこともあり、「パンと葡萄酒の奉納が行われなかった」こと、

「聖変化がなかった」こと、「典礼聖歌の一部が歌われなかった」ことを除くと、構成が大きく違わなかったため、ミサとの違いがよく分からなかった方や「時には集会祭儀も良い」と思われた方が少なからずいるようです。

しかし今一度考えてみたいと思います。今回の集会祭儀で私たちが拝領した御聖体は小池神父様が計算を尽くし、前の週に聖変化して下さったものを、香部屋の臨時の御聖櫃に安置したものでした。今後、予期せぬ司祭不在時や司祭の絶対的人数が足りなくなつたときには、御聖体を拝領できなくなることが想定されます。聖体拝領の実りは、カトリック教会のカテキズムに詳しく書かれていますので、ここでは述べませんが、聖変化がない故に御聖体を拝領できない日や赦しの秘跡を受けられない日が訪れたら、カトリック信者の生活は、どれほど空しいものになるでしょう。洗礼の恵みを受けた者は皆、共通祭司職を持っています。が、司祭等の職位的祭司職には、叙階の秘跡を受けた者だけに与えられる特別な恵みと権能があります。今回の集会祭儀が共同体として信徒と司祭各々の召命を考える機会になることを私は願っています。

財務状況について

財務委員長 神藤由紀夫

この役について2年近くとなり、2月の信者総会で次の方に委員長を引き継ぐこととなります。この機会に財務状況につき、過去3年間の流れについて見てみました。

昨年は大きな工事に伴い借入や支出がありました。それを除くと、収支は近年黒字で推移しております。また月定献金やミサ献金も減る事なく推移しており、健全な財務状況といえると思います。

しかしここで油断しないで下さい。高齢化の波は避け難く、今のままでは遠からず赤字になる可能性があります。これを回避するのは、一層の献金を期待するのは無理があります。

それでは支出を減らすかといえ、先日建物の維持管理にお金がかかるのを痛感しました。施設管理委員会の人が建物の内外を案内して説明してくれたのですが、あちこちの壁にヒビが入っていたり、

フロアリングの一部が腐っていたりと、日頃気がつかない費用が必要だどつくづく感じました。その他の支出は多少の儉約の余地があるかもしれません。

それは支出を減らすかといえ、先日建物の維持管理にお金がかかるのを痛感しました。施設管理委員会の人が建物の内外を案内して説明してくれたのですが、あちこちの壁にヒビが入っていたり、フロアリングの一部が腐っていたりと、日頃気がつかない費用が必要だどつくづく感じました。その他の支出は多少の儉約の余地があるかもしれません。

イロ待降節黙想会

「どこにいろのか」
(創3.8-9)

「誰も捜しているのか」
(ヨハ20.15)

「誰も捜しているのか」
(ヨハ18.1-11)

☆「目覚めていること：注意深くあること」
☆「だれを捜しているのか？」

あわれみのみ贈
: Misericordiae Vultus をさがす教会
F. 中川博道
指導 中川博道神父(カルメル会) 講話をルポ(池永)

家畜小屋 (誰も近づけず)

「私は必ずあなたと共にいる」
羊飼い(阻害された人)

世の中のキリストに会いたい
世俗化 霊性

どんなですか? 注意深く 隣人愛 苦しみ 隣人

自分の価値感で人を裁かない
人からほしいこと 教会 世界を変えてきた!
主と共に生きる キリストの生き方

神の本質を表わすでぎと 誰も傷つけない
わたしたちの愛だけを願う
無防備の幼子
インマヌエル(共にいて下さる方(神))

目を覚ましていなさい
祈る
すべての注意
☆今(現在)ここで生きる
注意深く

祈り 神
魂 注意
すべての 信仰・愛
祈り 信仰 愛
祈り 注意
不純物 (ルカ12.35~37)

過去の のりこぼし
未来の 心配

あかなる 科学 愛
限界 絶対的

財務状況の維持改善についても一つ思う事は、若い信徒の確保です。増やすというよりは、子供達が成人しても結婚しても教会から離れることなく家族で教会に通うという環境作りです。また新たな方や離れた方を迎え入れるのに、より工夫の余地がないものかと。これらは全教会の永遠の課題であって困難ではありませんが、司祭不足で常駐の教会が減ってしまう事と共通する問題ですので、今後真剣に向き合わねばなりません。財務に関する件はここまでにして、別の話をしましょう。他の教会へ行ってびっくりした話です。

「せせらぎ」での祈り

川本 芳實

町田教会では、「イエズス会の霊性センター」「せせらぎ」主催「一日の祈りの集い」黙想会が二〇〇七年度から、年三回行われています。

開催日は第三木曜日です。この黙想会はプログラムの中に霊的同伴者との面接の時間が組まれています。霊的同伴者とは？

祈る人一人ひとりが祈りをより深められるように、祈りの道を共に歩んで下さる人です。神様からの言葉が自分にとっての響いているか、聞き逃している事にも自ずと気づくように面接して下さい。

私たちは前向きで熱意に満ちている時、美しい事物に囲まれて、自分も賛美の心に満たされる感じがあります。祈る人の賛美・喜び・感謝・奉仕の心などがより深い味わいとなるめぐみ、神様と人格的なふれ合いがあるめぐみ等を頂ける事を共に願って同伴者はその場において下さいます。一方、私たちの心は自分の弱さ・醜さ等から目を背けたい気持ちになる時があります。そうした後ろ向きでいる時も、同伴者と共にあって、会話をすることで、そこに神様が

働いて下さって心が照らされ、「私はこういう仕方です」という事に気づくめぐみを頂く事が起こります。

霊的同伴とは、神様が働いて下さる場になるための存在とも言えます。

私たち一人ひとりに固有のお祈りを大切にされる霊的同伴を受けられる機会が設けられていて、町田教会は恵まれていると思います。

「せせらぎ」のこの集いについての詳細は、ナルテックスにあるパンフレット「黙想の家・祈りの家のご案内」に載っています。また、壁のポ

スターもご参照下さい。同伴希望の方のためのコースは毎回定員がありますが、他に定員のない、同伴を受けずに一人で祈りを深めたい方のコースも用意されています。

町田での次回開催日は来年二月十六日(木)です。間近になりましたら申込書を兼ねたチラシも置かれます。生活の中で私たちが出合う様々な体験を通して心の動きを丁寧によく見ることに、

◎神様とより親しくありたいと願っていらっしゃる方、◎自分をもっとよく知りたいと願っていらっしゃる方、是非ご参加下さいませ。

特別寄稿

喜びに生きる

聖園女学院高等・中学校長 シスター 清水ますみ

教皇フランシスコは話されました。「神はあなたに呼びかけて云われます。『あなたは私にとつて大切です。私はあなたを愛し、期待をかけています』。イエスが私達一人ひとりにおっしゃっているのは、このことです！ 喜びはそこから生まれます！」と。

私達をどん底から救いあげるためにとなり、十字架上で命まで与え尽くしてくださったイエスにとって私達は、頭数ではなく、かけがえのない個々人なのです。イエスは群れの中から迷い出た一匹の羊を探し出し、肩のせて帰ってくる羊飼いなのです。いつくしみの特別聖年のロゴマークの良い羊飼いは、最高のいつくしみをもって全人類を担っています。その目



七・五・三 おめでとう

11月13日

は背負われている人の目と合体しています。私達は、イエスと目があつたと感じた瞬間を体験したことがあつたでしょうか。イエスが私に目を注ぎ、私の目がそれを感じた瞬間に本当の喜びが溢れ出ます。イエスのいつくしみの目を感じるこそ、喜びの秘訣です。教皇フランシスコは、このみずみずしい喜びを知るためにイエスに倣う生き方、すなわち、相手の幸せを願って無償の愛で互いに愛し合う生き方を勧められています。

「わたしが愛したようにあなたたちも互いに愛し合いなさい」(ヨハネ十三・三十四)。「主において常に喜びなさい」(フィリピ 四・四・五)

世界の教会から

ポーランドのクリスマス

佐藤エルジュビエータ

ポーランドにおけるクリスマス。年月を経ても、それは色褪せることのない私の大切な思い出です。毎年、毎年、私の大切な家族とそれを分かち合っています。

まず、待ち遠しい待降節があります。教会で過ごす夕べ、神父様の説教、告解。大掃除にクリスマス前のケーキ作り。クリスマス・イブは朝から台所で大忙し。なくてはならぬ鯉のソテー。慎ましやかな朝食を終えたら、晚餐まで何も口にしてはいけません。待ちに待ったこの日、ようやくクリスマスツリーの飾りつけに取り掛かります。天井に届かんばかりの生木から漂う樹脂の薫り。ツリーには幾つもの小ぶりの燭台、次にランプ。いずれも灯すことを許されるのは、イブの晩餐の前でした。燭台に火、ランプに明かりが灯った瞬間、クリスマスの始まりです。晚餐を照らすのは、ツリーの明かりのみ。プレゼントはささやかなもので、決してそれが主役ではありませんでした。



オブワテクの分かち合い

す。祈りを捧げたらこれを取り、家族と分かち合います。晩餐のメニューはポーランドでも地方によつて様々です。必ずしも十二皿を揃えるわけではありません。私のお気に入りにはポルチーニ茸のスープ、エンドウ豆やキノコを和えたキャベツ、鯉のバターソテーにケシの実のケーキ。二十五日、二十六日は仕事もなし。共産主義の時代でも、これは守られていました。晩餐を終えたら、恒例のミサに出かけました。始まるのはいつも、イブの夜中の十二時。二十五日、二十六日は聖歌を家でも外でも歌いました。教会にはイエス様の誕生を人形で模したシヨプカが並びます。これを見るために、近隣の教会を歩いて回ったものです。きれいなシヨプカを見るのは毎年の楽しみでした。あ

とは雪さえ降ってくれたら、これ以上望むことはありません。

ツリーは、どんなに早くても公現祭（一月六日）までは飾っていたものです。

一月に入っても、クリスマスの雰囲気は途切れることはありませんでした。学校でも職場でも、飾りつけはそのままです。学校のクリスマスパーティーといえば一月にやったものです。家から食事や飾りつけを持ち寄っては教室を彩りました。

ポーランドにおけるクリスマスの食卓には、今日も伝統的な献立が並びます。様々な流行も時には取り入れてきましたが、今もクリスマスはポーランド人にとつて心の拠り所なのです。日本人にとつてのお正月のように。そしていつも、家族と過ごすものでした。

編集部より

☆お詫びと訂正 313号の

「いつくしみの特別聖年 巡礼バスツアー」の記事に誤植がありました。お詫びして次のように訂正いたします。

昼は雲の柱、夜は日の柱↓昼は雲の柱、夜は火の柱。

☆犠牲献金報告は今回はありません。☆次号の編集会議予定

2017年1月8日09時30分

クリスマスと年始のミサ
☆クリスマスのミサ 12月24日(土) 17:00, 19:30, 22:00
イブ(24日)のミサ前にミニコンサートを行います 12月25日(日) 7:30, 10:30
2017年 ☆年始のミサ1月1日(日) 00:00, 11:00



長寿感謝のミサ(10月30日) 主日の午後のひととき、多くの高齢者をお迎えし、ミサ後には懇親会が催された。

信者動静

2016年9月~11月

(個人情報のため、削除しています)